
授天力(エネルギー)の戦士が世界を廻る-作るぜ!!最強の"絆"!!-

優氣凛々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

授^{エン}天力の戦士が世界を廻る - 作るぜ!!!最強の”絆”!!! -

【Nコード】

N0956W

【作者名】

優氣凛々

【あらすじ】

これは筆者が「こんな風になりたい」「こんな技使いたい」等という厨二丸出しこんちきしょうな妄想からできた主人公「御神 ユウタ」があちこちの漫画、アニメの世界で頑張る話です。

一応主人公にはまず死ぬほど…てか死ぬ痛みを味わってもらいます。

「そんなグロいの嫌いよ!」とか「なにこいつ、マジでキモいな」とか思った野郎ども、表にで「殴

回れ右して下さいね…(鼻血

因みにR・15くらいの表現は出したいなと思いますよ

苦手だなと感じたら、縄で輪作ってそれに首w（ブロッケ殴

回れ…右…して下さいね…（流血

第1幕「ワシ脂肪：死亡宣言」

やあ、みんな元気かい？ハッピーかい？

俺は…絶賛不幸中だよ…

何故なら…

カ「サキ姉、俺のDS返せよ！！」

サ「カツリのは私のもの、私のは私のものよ！！」

何故なら我が愚弟と愚姉が年甲斐なくゲームごときでケンカしてるからだ。

サキ姉さん、あんたは青狸に出てくるガキ大将か…

自己紹介が遅れたな！すまない…

俺の名は「御神 ユウタ」という。

しがない専門学校生生活を細々としのいでいる。

今、一応夏休みに入ったから、実家がある日本は東北、覆山県に来た。

専門学校は関東の裁姑呂県にある。

いわゆる一つの「里帰り」さ？

んで、今に至る。

只今、我が愚弟「御神 カツリ」と愚姉「御神 サキネ」が絶賛ケンカ中だ…泣いていいかな？こんちきしょう…。
カツリはふくよかながら力は強く、プロレスを幼少から叩き込まれている

サキネはテコンドーをやっていたせいか、胸は無い。コンプレックスらしいが、カツリはヴィジュアル系、サキネはアイドル系並みに顔が良い。俺はその間くらいをいつているが…なんだか複雑だな…

あつ、カツリがサキネのミドルキックに伏した…えげつない…

サ「あゝー！！イライラするなあ！ユウ！コンビニいくよ！ひんやりしたの食べたい！」

ユ「へえへえ、分かりやしたよ…ったく！」

俺はサキ姉さんの手にあるDSを素早く取った。俺は柔道と空手をやってるだけあつて、瞬発力は右に出るやつは家族にはいない。

サ「なゝっ！ちょっと、ユウ！」

ユ「俺の貸すからカツリには返してやれよ…全くなあ、ホレツ！」

DSをカツリに投げて渡す。カツリはそれをスライディングキャッチした。

…野球しよう。チーム名はリトルバ○ターズ。

カ「うわつと！！サンキュー！ユウ！」

ユ「面倒なんだからもうやめろよこんなガキみたいなケンカ…」

サ「むう……ほら！！早くいくぞユウ！」

サキ姉さんは俺の腕に自分の腕を組む。そのせいか、無いが少しは膨らんでいる女特有の柔らかさと体温が……

ユ「…なんだよ、引っ付かなくても行くから？」

サ「〜」

それからサキ姉さんにされるがまま、俺は家から500mくらいの家向かいのコンビニに行った。

そして今日、俺は…

本来遭わないはずの最終イベントに遭うことになる…

…所変わってコンビニ…

サ「ふう〜 やっぱり上手いなあ！！ペロチャンアイスクャンディ
！」

…味はうめこぶだがな…

どうやらサキ姉さんの味覚は足技以上に飛び抜けてずれてるらしいな…

因みにワシはビターチョコが隠し味の「ワシのスイーツ」クレープ

「」だ

…なんで一人称が「ワシ」か？

精神年齢が「80くらいの縁側にいるおじいさん」だと言われたからな…

サ「…ユウのも美味しそうだなあ…」

…そんなハイエナが餌を貪るような目でみんなよ…？

ユ「仕方ないなあ…ほら、一口食べよ。」

サ「やたあ んじゃ、ありがたくいただきます」

…なんかツツコミたく無いが…何で俺の食いかけに食いつくんだよ…しかも一口でかい…はあ

サ「…ユウの味がするう」

ざわああああ…！！！！

なんだってんだよ今の！完璧にイタイよね！？しかも俺の味で！？公衆の面前でやめるよバカ姉貴いい！

サ「幸せ〜 ユウの味、美味しかった！」

ユ「だああああ！だからやめ…ろ…っ…って…！！」

迂闊だった

サキ姉さんは幸せ過ぎて周りが見えずに…

車道のと真ん中において…

しかも…

4セトラックが…姉さんめがけて突っ込んでいた…

ユ「ばっ…か姉貴いいいいい！」

サ「えっ…きゃああ!??」

俺は咄嗟にサキ姉さんを正拳突き的要領で歩道まで突き飛ばす
だが…

俺は間に合わない…

ユ「南無三…!!」

ドゴオオオオオン!!!!!!

俺は姉さんの命と引き換えに…自らの命を差出し…絶命した。

第2幕「お約束だよな？多分。」

ユ「……………あるえ？確かワシは死んだんだ…よなあ？」

ワシは現在、な〜んにも無いま〜ん〜っ白な空間に浮いてる…
と言った方がしっくり来る。

今の1人称で「ジジイかよ…しけるなあ…」って思ったやつ、今すぐ後ろ向け。…締めるから。

ワシは神話とか天国とか地獄とかそこそこ好きで、一応イメージはありやがるんだが…やはりイメージはイメージで、現実はこのまんかな？と思った。

日本のみならず世界ではうん十、うん百万人と死に至っているが…別室らしいのか誰一人、しかも何一つ見当たらない。正直さみしい。ねえ知ってる？ウサギさんはさみしいと死んでしまっただよ？動けるからとりあえず散策しよう、うん。じっとしてるのは性に合わない。

？「うめんなや〜…」

「散策しよう」と発言した数分後、綺麗な羽が3対生えた綺麗な金髪ウエーブのお姉さんがいきなり土下座してきた。スライディング DOGE ZA初めて見た…痛そうだな。

？「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！」

しかし3対かあ…俺の知識じゃ最大の羽の対は6対12翼の羽らしいからちょうど中間管理職？お疲れ様です。

？「因みに私、神様ですよー！ごめんなさい！！ごめんなさい！！ごめんなさい！！」

ユ「心読むなよ…あと、謝るくらいなら現状を教えてくださいよ。あと、誰だよあんたは？」

するとお姉さんが顔を上げた。上目遣いなせいか、いや、顔立ちが可愛いせいとか、ちょっと見いった。かわいいな。

？「えへへ…／／／ありがとうございます／／」

ユ「…／／／！勝手に心読むなっば！！…あんた、名前は？ワシは御神 ユウタだ。一応日本でくたばった。」

？「あつ…はい／／／私は…」

エ「エリリイって言います！神様です！！よろしくですよ…ユウタ…さん／／」

照れんなよ…。神様かあ…ということとはくたばったのは確定だな…
？どうせ心読んでんだからわかんたろ？

エ「…？どうしたんですか？…あっ、因みに心はもう読んでません
よ？」

ユ「都合悪いな！！？今まさに重要事項だったのに！！？？」

調子狂う…この子は天然さんなんだな？仕方ないか…。

エ「私は天然さんですか？」

ユ「何で今さら心読んでんだよ！？」

分かんないよこの子！！？くそお！

第3幕「異世界に行け、という名の厄介払い」（前書き）

作者「なかなか更新できなくてすみません！あと短くてすみません！駄文すみません！」

ユウタ「おいおい、ワシの本体なんだから頑張ってくれよ…」

作者「不定期更新覚悟ですがよろしくお願いいたします！」

ユウタ「まああんなベタなシチュエーションはないわな…」

作者「生きててごめん…」

ユウタ「ハイハイ、縄で輪を作らないの。」

第3幕「異世界に行け、という名の厄介払い」

やあ…みんな元気かい？ハッピーかい？

ワシは頭がいたい…

みんなお馴染み御神 ユウタだ。

今、絶賛お説教中だ。

え？空間無いに誰もいないのに誰を？
いるじゃん…エリリイって神様が…

ユ「……………」

エ「ヒック…えう…………ふええ……………」

無言の圧力は相当いたい。精神的に来るものがある。生前に散々思い知らされた。

因みにエリリイはワシの怒りが伝わっているらしく泣きじゃくっている。

えっ？女泣かして男かお前は？ってか？いい俳句を教えようか？

かわいいが

いつでも正義と

思っなよ

何でこんなにカオスな現状なんだって？

いづのはめんどくさいから回想入れんぞ？…そこ、あまり深く追及すると禿げるよ？

~~~~~回想~~~~~

あのあとワシは一応死んじまった理由を聞いていたんだが…

ユ「は？手違い？」

エ「はうう…はい…あなたは本来ならばあと50年は生きられたんですが…」

ユ「…ですが？」

エリリイはまた土下座した。

エ「私が寝ぼけて仕事したせいであなたの生期を今日だと記入してしまい、あなたのお姉さんに50年後と記入してしまってあなたの50年という余生うはうはライフをぐちゃぐちゃにしてしまいましたあー！！ごめんなさい！！」

要するに、俺はこの子…エリリイに故意が無くても間接的に殺された…のか？いや…姉さんが死ぬよかましか…俺より姉さんが生きていた方が世のため人のためだもんな！！

姉さん、あと50年も生きんのか…誰か嫁にもらってくれんかね？

エ「おお…！あまり怒ってらっしゃらないみたいですよ！やっぱりユウタさんは優しい…」確かに死んだことにや怒ってないな…え？」

エリリイが顔を上げた瞬間、サーッと青くなっていく。

そりゃ、手違いでくたばったつても死んだんだ。死んじまったら仕方ない。しかし…寝ぼけて仕事だと？…許せん…！！

ワシは顔に出るタイプらしいから、顔に怒りが滲んでるに違いない。

エ「へうう！？ユウタ…さん？」

ユ「……………」

~~~~~ 回想終了~~~~~

エ「ヒック…えう…ユウタ…さん？お願い…れすう…許して…ふえ

え…くらすいよお…」

…いい加減泣かれるのにも罪悪感を感じてきた…。さすがに怒りすぎたな…謝ろう。

ユ「…ごめん…怒りすぎたな…実際俺も学校で寝ちやうからなんとも言えんか…だからもう泣くなよ。」

エ「ユウタ…さん？…ふえ！？／／／／」

そういつて、エリリイを軽くだきよせ彼女の頭を撫でる。カツリが泣いたり、姉さん宥めたりしたときと同じだ。あいつら溜め込むタイプだからな…だから俺が受け止めてたんだ。今はもう無

理だが…

ん？なんかエリリイの顔が赤いな…泣かせ過ぎちまったな…

ユ「泣くなつて！まだ聞かなきゃならん事があるんだから。」

エ「……………はいい…／／／」

あれから数分後、泣き止んだエリリイはワシが呼ばれた理由を教えてください。

エ「えつと、実はユウタさんに「ストップ！」ふええ！？まだ話してないですう！！」

ユ「違う違う…ワシの呼び方に不満があつてな？」

エ「呼び方…ですかあ？」

エリリイは何なんだと言わんばかりに首をかしげている。そう、ワシは呼ばれかたにちょっとしたこだわりがある。

ユ「さん付けなしな？ユウタでいい。」

エ「…どうして…ですう？／／」

ユ「せつかくこんなにま〜っしろな空間で初めてできた”友達”だからな！！さん付けはよそよそしくて嫌いなんだ。頼むよ。」

エリリイはしぶしぶ了解してくれた。…なぜに体をくねらせてるか
疑問だが…

エ（ユウタ…ユウタ…ユウタユウタユウタ！いい響きですう／＼／
／）

…急に悪寒が…。誰かがヤンデレ化したのかな？

ユ「んで？話を反らして悪い。なぜにワシはここに呼ばれたんだ？」

エ「実は救って欲しい世界があります！！いわゆる一つのトリップ、
ですう」

うわぁ…ベタなやつ来たなぁ…。

第3幕「異世界に行け、という名の厄介払い」（後書き）

エリリイ（ユウタ…ユウタ…あああ！なんか心がキュンキュンするですう）

ユウタ「…どうしたんだ？」

第4幕「チート作成計画！……ほどほどに」(前書き)

作者「更新できなくてすみません！あと短くてすみません！駄文すみません！」

ユウタ「まさか毎回言わないよな？」

作者「そして何より、読んでくださっている方々に感謝します！……この小説、画像はれるかな？」
ユウタ「？どうして？」

作者「もし画像みて気に入ってくれたらうれしいな　あと、随時リクエスト募集中ですよ」

ユウタ「まあこんなやつにかかれたく無いだろうが…もしよかったら感想にのせてリクエストしてやってくれ。」

作者「さりと酷い…？」

第4幕「チート作成計画！……ほどほどに」

やあ！みんな元気かい？ハッピーかい？みんなお馴染み神様に殺られちゃった御神 ユウタだ。

エ「一応こちらからの依頼なんできちんと協力させてもらいますですう」

ユ「お前の「エリリイですう！」エ……エリリイの言いたいことは概ね理解した。」

前回のあらすじ

「異世界に行ってもらいますですう」

……以上だ。

てな訳で異世界行が決行（強制的）されるが……俺の今のスペックは柔道と空手というなかなか突っ込み隊長的なもんだが……さてどんなものが貰えるんだ？

この流れはチートトリップだな……チートは嫌いだからそこそこ強くなるう。うん。

エ「でわでわ！あなたにとっておきのプレゼント、ですう」

ユ「……なんだ？見た目指輪だな？」

渡されたのはな〜んも特殊な物がなさそうな王冠のエンプレムの金

指輪。

エ「会って数分で婚約指輪／／きゃああ！！あたしったらあ！／／」

ワシは無言でエリリイに近より後ろから抱き締めた。

エ「ユ…ユウタ…／／大胆すg……っ！…っ！？」

そして文字通り首を締めた。

はだか締めっという、まあありきたりな腕を交差させて締めるアレだな。

ユ「ごめんよお？おじいちゃんの耳で聞き取れる周波数と嬢ちゃんの発する周波数がちがくてねえ…キコエナカッタナア？」

~~~~~  
エ「それは…どんなにいれても…大丈夫な無限倉庫って…言います  
う…はふう…／／」

あのあと、なんとかエリリイを吹きかえらせ、話を聞いている。ん？才とした？うん！もちろんだよ！いやあ、神様も才チンだな〜！  
！新たな知識だ。

どうやらこの指輪は青狸のポケット並みに入るみたいだ。便利なもの手に入ったなあ

ユ「ふ〜ん、なるほどねえ…能力とかはくれるのか？」

エ「は…はい ええと…「小説内のキャラの能力」と「譲歩」、  
身体能力の強化」ですう」

…まじでかあああああ!!?!?!??

まじでか!?!?それなら有難い!

ワシは小説を書いているが、使えないのかなあってず〜〜っと思っ  
ていたんだ

譲歩ってのはさしずめ能力の切り離しと流入か…面白い!!!

ユ「あつ、身体能力はほどほどにな。あまり強すぎても困るから。」

エ「了解ですう ユウタ!これでいつでも異世界逝かせられるです  
う」

……ん?変換間違えてるよな?「行かす」だよな?

エ「容姿も変えとくのでお楽しみ…ですう / / /」

お〜い、何一人でくねくねしてんだ?

てな訳で、異世界行の準備は着々と進んでいく。

第4幕「チート作成計画！……」(後書き)

作者「さて、能力は次回に紹介だ」

エリリィ「ですう」

ユウタ「次からが不安だ…ワシ…生きて残れるかな？」



第5幕「小説読んでるとよくあるパターン」神様はワシ等の身の保証をしなさい

作者「更新できなくてすみません！あと短くてすみません！駄文」  
以下略。「最後まで言わして……！」

ユウタ「迷惑極まりないわ！」

サンライト《少し落ち着いて下さいませ。》

作者「お前ら、見てくれた人が1000行きかけなんだぞ！？嬉し  
いよ！嬉しすぎてこの際……！」

ユウ・サン「《この際……？》」

作者「このわっかに首を通して……！」

ユウ・サン「《はあ……。。》」

第5幕「小説読んでるとよくあるパターン」神様はワシ等の身の保証をなさす

前回のARASUJI

エ「ついに…ユウタに婚約ゆっ、オとし足りなかったか？」ごめん  
なさいごめんなさいごめんなさい…！」

~~~~~

やあ！！みんな元気かい？ハッピーかい？遂に神様のことをオとし
た（解釈自由）御神 ユウタだ。
ワシは今…

ユ「……………はあ。」

絶賛落下中だ…。

一応あつちの真っ白空間でいろいろ能力の説明を受けて、必要なも
のは金指輪に入ってるからというエリリイの言葉によりすぐ行ける
用意はできたんだがな…

「読まなくてももいい回想」

エ「夢を見てるときだけこちらの空間に来れるですう」

ユ「へえへえ…分かりましたよっ…世話になったな、エリリイ。」

「

少しただけだが、四元リングももらったし、その他も頂いた。礼を言わないと無礼だな。

エ「はい…あ…あの…！」

ユ「ん？どうしたんだ？」

エリリイはうつむいて顔が赤い。顔とスタイルがいいせいか、絵になるな。

エ「たまには、顔出しに来てください！もちろん、毎日でも大歓迎ですからあ…！」

要するに寂しいのな…真っ白空間だし寂しいよなあ普通…

エ「いえ、別に部屋があるから大丈夫ですう」

カチーン

ユ「顔出しになんて来な…すみませんでしたあ…！来てください！…全くなあ…！」

~~~~~

てな感じにとりあえずエリリイの出した扉くぐったら…

重力に従って落ちたと…まあ、そんなこんなで今に至る訳だが…

ぶっちゃけ地面が恋しい…とそろそろ地面と接触しそうだ…  
死なないのか？んなこと気にしてたらキリがないからこの際…

ユ「ユウタ イン ワクワク 異世界！やっはああああ」

はっちゃけるのもまた一興かもな！！

ズドオオオオオオオン！！！！！！

ユウタ、着陸完了……。

ユ「フムウ…こんな衝撃に耐えたワシの体が怖いな…少し痛いけども…」

現在、ワシはクレーターの真ん中にいます。  
なんで？落ちた時にクレーターが出来たから…かな？  
怪我もしてないとすると、骨密度、骨軟性、さらには皮膚強度や筋肉の能力が拡大に上がったらしいな。さすが神様なだけあるか。エリイには感謝だな。

？《あなたが私のマスターですか？》

ユ「っ！？誰だ!？」

どこからともなく声が…  
聞き覚え無いぞ？こんな透き通って澄んだ優しい女の声なんて…

？《…貴方の腕に付いてるブレスレットです》

ユ「ん？腕輪が…光って…」

右腕に付いていたブレスレットが光っている。確かエリイに渡された守りのようなもの…

？《貴方のお名前は？》

ユ「ユウタ…御神 ユウタだ。」

？《マスター登録完了…私はインテリジェントデバイス…名前はありません。マスター、付けていただけますか？》

インテリジェントデバイス？聞いたことあるが…まあいいか。ブレ  
スレットは太陽を型どったエンブレムの真ん中に濃い赤の宝石が付  
いている。

ユ「そうだなあ…装飾には太陽か…サンライト…か？」

サ「分かりました。私はサンライト。あとはマスターがset u  
pすれば完了です。私の言葉を復唱してください。」

ユ「分かった。」

サ「我に宿るは神秘の太陽…」ユ「我に宿るは神秘の太陽」

サ「我が振るうは焰の神撃…」ユ「我が振るうは焰の神撃…」

サ「我に裁かれし闇の力は…」ユ「我に裁かれし闇の力は…」

サ・ユ「神の炎に焼き尽くされん！サンライト…set up！  
！」

ワシの体は赤い光に包まれて、服装が変わった。

黒のワイシャツは黒のロングパワーシャツに変わりそこから紅蓮の  
ノースリーブロングコートを羽織った。

黒のズボンは七分丈のズボンに変わり、スポーツシューズが装甲に固められた。

両手は紅蓮の籠手はめられ、縁は黄金に煌めいた。

光が収まる……

ユ「……おお……おおお！？すげえ！」

その武装が……ワシの小説のオリジナル主人公「東寺 神太」君のもの！テンションが上がらない訳がない！！！！

サ《お気に召されましたか？》

ユ「ああ！すげえ嬉しいよ！！夢のようだなあ……あれ？」

サ《？どうされました？》

そついえば……さっきから違和感バリバリだったから今さらだが叫ばせてくれ……

ユ「あるえええええ！？からだがちっこくなつとるうううう！！」  
「？」

そつ、ワシは19歳なんだが、何か手が異様に小さくなっていたから……

まさか、あの頭脳、精神的には16、7歳にも関わらず小学生のま  
まで小学生よろしく16、7歳のおなごと風呂に入ってるヤラスイ  
イ某少年探偵の如くちっこくなつたのか!?

ユ「エリリイ! 謀つたなあああ!?!」



第5幕「小説読んでるとよくあるパターン」神様はワシ等の身の保証をしなさい

エリリイ「ユウタがシヨタ…ユウタがシヨタ…ユウタがシヨタ…あ  
ああ…!! // // // // // // //

エリリイの何かが暴走した。

その頃…

ユウタ「さあて！今夜はあいつのところ行っていますかあ…（鬼黒）

」

サンライト（マスター…お気の毒に…）《マスター、お手伝いしま  
す！》

ユウ、サン「《いざ鎌倉！…！…！》」  
いつの時代だよ…

第6幕「お隣さんへの挨拶は大切！〜鏡を見たらお約束〜」（前書き）

作者「更新できなくて」《言わせませんよ！？（ねーよ？）》「は  
やっ！？」

ユウタ「あのなあ…ワンパターンはダメだろ？」

サンライト《だから私達があなたがダメダメなお陰で不本意ながら  
盛り上げようと尻を拭ってあげてるんですよ！？わかりますか？だ  
いたい貴方は》

ユウタ「わあ〜！？なんて滑らかな毒舌！でもこれ以上は止めと  
け！出ないと…」

作者「…俺は小説の風になる！！！」

ユウタ「あああ！？もう縄のわっか何個目だ！？あとリストカッ  
トすんな！！さらには一酸化炭素吸い出すなあ！！！」

第6幕「お隣さんへの挨拶は大切！〜鏡を見たらお約束〜」

前回のアラ筋

ユ「着地したら…からだが縮んでしまっていた！」

やあ…みんな元気かい？ハッピーかい？只今ネガチブな御神 ヨウ  
タだ。

なぜ？…からだが…からだがちっこくなってたからだだよ！！  
あんの神様一回叩きのめさないと分からない質みたいだなあ…

…それはさておき、一応住居らしきものがあるみたいだ。ワシはと  
りあえず行ってみることにした。  
因みに外見年齢は9歳くらいだ。しかし、頭は普通に19歳並み…  
いや、それ以上かもな。精神年齢は相変わらず80代くらいだなき  
つと。

ユ「うん、普通に住みやすそうだな。…一階は要らないだろ？」

なんか庭付きの一戸建て二階つきがワシの自宅らしいな。  
…標札しとこ。

ユ「はてさて、なかは…っと…うん、案外暮らしやすい設計だ。嬉

しいことに和室まで！裏には道場があったな！」

至れり尽くせりだな。あとは…鏡を見てみよう。

どんな顔をしてんだろうか？道を歩いてたらなんでか男に絡まれたし…ワシはそっちの気は無いぞ？

どれ、お顔拝見。

ユ「……………嘘？」

鏡を見たら…なんでか女顔になっていた。

髪は白色、まるで雪みたいに真っ白い。そして前髪は蒼のメツシユ、長さは肩甲骨くらいまでで、眼は鮮やかな緋。まるで燃え盛る炎。しかし、右目はなぜか黄金色になっていた。そして止めは、肉体的にも顔的にも中性的だが女寄り…

ユ「…と、とりあえず服を揃えないと…」

ワシは…改めて俺は現実逃避をすべく服を探しに町を散策することに。

~~~~~

ユ「ざっと…こんなもんかな？それにしても…服は黒が多いな…」

あのあと服や雑貨、食材を買いに行った。（因みになんでか俺の通帳が入ってて、額がなんでか0が10個…通帳を開けてみたらブラツクカードが…入ってた額が0が11個…なして?）

まあ無駄遣いするほど無いからな…昔から欲ないし…。

サ《お疲れ様です、マスター!》

ユ「ん、お疲れさま。まあ鍛えてた筋力が落ちはしたが…道場あるからまた鍛え直しかな?」

「からだ縮んだせいかな、筋力が衰えたっていうか…歳に合わせたっていうか…」

サ《マスター、ご夕食には早いのでお隣さんへの挨拶をしてきてはいかがですか?》

ユ「賛成、手土産ちょうど買っておいたんだ。まだ夕方だし…いいか。」

俺は、とりあえずお隣さんへの挨拶をすべく「翠屋」という喫茶店に行った。巷では有名な喫茶店らしく、主に女子高生や若奥様方に絶大な支持を受けているらしい。

…ティラミスあるかな?

ただ…そのときはあんなことが起こるとはミジンコ並みに思わなかった。

~~~~~喫茶店「翠屋」~~~~~

?「はいいらっしやいませ……!」

ユ「こ…こんにはは!俺は今日から隣に越してきた御神 ユ」  
「き  
やあああああ!!可愛~~~~い!!!!!!」  
「ぐほお……!!?」

なんでか知らんが綺麗な会計のお姉さまがタツクル…もとい抱きついてきた。…大の大人がはしゃくなよ。本人は大きいし…それに俺可愛くないし…

お姉さまは綺麗な栗色の髪を腰くらいまで長くしていて、可愛いというよりは綺麗ななという印象だ。

?「いやあん可愛いわあ!!お人形さんが息をしてるみたい」「は…離して下さい!あうう…//」  
「あはあん!!!照れてるのも可愛い~~~~!」

何時になつたら抜け出せるんだろうか…綺麗だし胸大きい…おおつと!!何を考えているんだ!!「邪念は人生のごみだ!冷静になるんだ!」  
「って死んだじいちゃんが言ってたし!!」

………煩惱退散!!!



ユウタ「なっ…!? やっ止める…!! 放せ…!! 近寄るなあああ  
ああああああ…!!…!!…!!…!!…!!…!!…!!ぎゃああああああ  
ああああ…!!…!!…!!…!!」



第7幕「美味しいものを食べて苦い目に遭う」主人公なんてこんなもんかな？

やあー!!みんな元気かい?ハッピーかい?

俺は今...

ユ「……ん おいひいな」

喫茶店「翠屋」で美味しいティラミスを堪能してます。

?「美味しい?家のティラミス!」

栗色の髪をツインテールにした女の子付きで

因みに女の子はオレンジジュースとシユークリームだ。

ユ「うん このビターな苦味が何とも言えん!しかもブラックコー  
ヒーもあるし!ありがとう!高町さん!」

そう...この女の子はさっき入り口でタックルがましてきたお姉さま

「高町 桃子」さんの娘、「高町 なのは」という。

なんで娘さんと食べてるのか?いきさつは例の如く回想で説明しよ  
う!タララララン



ぴくん…

桃「ケーキじゃなくても好きなものをサービスしようかな？なんて  
「テイラミスは！？」もちろんよ？だけどねえ…」

ユ「ぜ…」

神よ…

ユ「ぜ…」

私目に…

ユ「是非とも着させて下さあぁあぁい！……！！」

一時の幸せを下さい？

…フリフリエプロンのメイド服に留まらず…  
セーラースク水とかチャイナミニスカとかを着せられました…  
写真撮られました…ビデオ撮られました…鬱だ…死のう。

せめてティラミス食べてから？

.....

ユ「クソウ…やっちゃまった…」

今俺は喫茶店のテラスのテーブルに伸びている。

流石に男のプライド潰しすぎた…俺のツギハギハートが今にもグシヤリそう…

早く…ティラミス来ないかな？

？「お待ちせしました！ティラミスとサービスのブラックコーヒーです！」

…聞き覚えのない声がする…

幼さが残りつつ…しっかりと子供の元気溢れる気を感じる。初耳でも耳に残るような、可愛い声。

俺はとりあえず突っ伏してる顔を上げた。

？「ふえ！？可愛い〜〜！」

さっきの桃子さんを幼くしてツインテールにした女の子がいた。遺  
伝か？姉妹かな？そうだとしたら素晴らしいとおもった。

女の子はテーブルにティラミスを置くとすぐに店に戻っていった…

？「食べるのまってなの〜！！」

って叫びながら…

？「お待たせ〜」

さっきの女の子が戻ってきた。トレーにはオレンジジュースとシ  
ークリームが乗っている。

ユ「もしかして桃子さんの妹さん？」

な「違うの〜！！なのはは妹じゃなくて娘なの まだ名前教えてな  
かったね？わたし、高町 なのは！小学3年生！」

ユ「分かった。」俺”の名前は御神 ユウタ。よろしくn「ふええ  
えええ！？もしかして男の子！？」…なんで驚くのさ…」

止めてくれ…その純粋な無邪気は俺のツギハギハートの破壊を促進  
する…

~~~~~  
…てなわけでツギハギハートのダメージを回復すべくティラミスに
がつついてる訳ですな

今までで一番美味しかったぜ！

ユ「ご馳走様…結構なお手前…」

結構どころかかなりなお手前だ！！

な「ユウタ君のお家はどこにあるの？／／」

ん？高町さん顔が赤い…

さつき相当慌ててたんだなあ。

ユ「翠屋の近く。今日はまあ、お隣さんへの挨拶ってところだった
…んだが…理不尽…」

な（さつきお母さんが持ってた写真かなあ？可愛いなあ〜って思っ
たらユウタ君だったんだ／／）

ユ「ご馳走様でした。美味しかったです！」

桃「私達もオイシイ思いしたからいいわよ？」

桃子さん…言わない約束…

ユ「…まあ、これからよろしくお願いいたします。」

な「そういえばユウタ君？」

ユ「？なんだい、高町さん？」

な「いろいろ話してて聞けなかったけど…ユウタ君の両親のこと…」

ん？なんだこの流れ？

ユ「両親はいないよ。ひとり暮らしだけど？それがな」
「あらそれは大変ねえ」
「…へ？」

嫌な予感がひしひしする！逃げたいけどなんかからだは動かないよ！？

するといつの間にか桃子さんが俺の肩を掴んでいた。

桃「ユウタ君、夕飯食べていかない？」

ユ「いや…大丈夫だ「食べていかない？」大じょう「食べていかない？」…分かりました…」

こんなんばかり…

今日は高町家で夕飯をいただく（強制連行）ことに…

漫画とかの主人公の苦悩が分かった今日この頃の俺…

第7幕「美味しいものを食べて苦い目に遭う」主人公なんてこんなもんかな？」

ユウタ「……………くそつたれえ…／／／／／／／／／／／」

只今ユウタ（セーラー白スク水ネコミミver.）コスプレ中…

作者「ふふふ……………どうだこの野郎！」

ユウタ「ま…まだ…まだまだ大丈夫だぜはっはっはっ「きゃあああ
あああああああ！可愛い〜！！」「ぎゃあああああああああ
あああああああ！」

なのは、桃子強襲

作者「たくっ！ワシがそんなことでは終わるわけないだろ！！！」

？「まったく…なのはってばユウタになにやってんのよ…」

作者「アリサ…あんたは次までお預けだよ…」

ア「いいじゃない別に」

作者「作者的によろしくありません。」

ア「ふう〜…ケチ！」

第8幕「自分の能力確認を怠らないように」予想外だったりする」(前書き)

「作者的キャラ弄りコーナー」

作者「さあさあよつてらつさい見てらつさい！更新遅めな作者が送る、登場人物弄りコーナーだよ」

ユウタ「見たりしねえし寄らねえし、何より早く更新しやがれ…！」

サンライト「まったくですね。」

作者「んまあ今回はかぎかつこの使い方を紹介しようかな？弄る気分じゃないし…」

サンライト「まあ免許筆記試験でつまづいてるのが悪いですよね。」

作者「くそたれなすびいいいい！！！！」

名前「」 会話ノーマル

名前「」 念話

名前「」 デバイス会話

名前「」 デバイス念話(サンライト限定)

【能力】 能力名

「技名」技
「技名」技
技名呼び

第8幕「自分の能力確認を怠らないように」予想外だったりする」

やあ！みんな元気かい？ハッピーかい？

ユ「ふあ……朝か。」

俺はとりあえず、あの高町家で夕飯をいただきました。そのあとは説得の末に自分の家に帰りました。

だって…なのはさんのお兄さん、高町 恭也さん、喫茶「翠屋」店主にして桃子さんの旦那さま兼ストッパーの高町 士郎さんの殺気がひしひししてて寛げないし…食事も満足に取れない…苛めか？理不尽やねん…

サ《おはようございます、マスター！》

ユ「おはようさん！…今まで空気だったな…」

サ《言わないで下さいよ…》

それはさておき、サンライトを起動させたは良いけど…性能なり何なりを確認してないな。

エリリイが言っていた【小説内のキャラクターの力を使える能力】

…要は想像創造能力みたいな力？はまだお目見えしてないし…どうしようか？

サ「マスター、マスターはいつ？」ガッコウ」に行かれるのですか？」

ユ「ん、明日かな？確かどこかの大学附属小学校らしいが…」

そう、何かエリリイが気遣ってくれたみたいだけど…もう俺は小学校のみならず高校以上の知識を有してるんだぞ？

サ「なら起動して使えるフォーム、バージョン、技等の確認をしませんか？」

ユ「…だなあ。確認しないと戦うも糞も無いからな。ふふふ…楽しみだ！」

俺は朝食を食べて（因みにメニューは、焼き鮭と白菜とキュウリの漬物、豆腐とワカメの味噌汁、白米のいたって和風）寝間着から着替えて家裏の道場に向いた。

……
時は遡り昨夜、なのはルーム

な「ねえ、ユーノ君…？」

ユーノ「なに？なのは？」

なのはは胸長のフェレットに変身できる少年、ユーノ・スクライアと話していた。話すとしても電話越しだが…実はこの二人は魔導師と呼ばれ、“デバイス”という武器を使い戦うもの。

数日前まで”プレシア・テストロツサ事件”と呼ばれる事件を解決？したばかりだった。

な「今日、もしかしたら私達と同じ魔導師かも？って子と仲良くなっただけど…」

ユ「どんな感じの子なの？」

な「私と同じ年くらいかな？名前は御神　ユウタ君って言うんだけど…」

ユーノ「そうなんだ…まあ、危険はないだろうから大丈夫。管理局は何もしないさ…クロノとかは分からないけど…」

な「大丈夫！もし何かしたら…O H A N A S Iなの」

ユ「ノは悪寒を感じたという…」

.....

戻って、御神家道場。

ユ「さあて、やりますかあ！！」

サ《今のマスターならset upとえば大丈夫ですよ》

ユ「分かった！煌めく太陽、サンライト！set up！」

サ《yes、my master！version、”H”set
up！》

ユウタの体が煌めき、初めて発動した時と同じ格好になった。

サ《この姿がバージョン”H”です。速度重視の形態で主に拳での近距離、弾幕系の中距離、砲撃系の遠距離など、戦闘でのオールレンジ対応型です。わたしサンライトの基本形態とも言えますね。》

ユ「なるほど…なら基本この姿でいこうかな？」

サ《他にも有りますが？いかがいたしますか？》

うーん…他のもなかなか魅力的だが…

ユ「まだ基本にも慣れてないからしばらくはこれで！しかも拳だからやりやすい！」

サ《分かりました。では、次はフォームについてですね。

form” edge”… road!》

すると、籠手部分が変化して、指がまるで猛禽類のように鋭くなつた。すげえ…ヤバい！かつこいいい！

サ《これはエッジフォーム。主に相手が武器を持っていた時の補助的役割ですね。因みに基本形態はブローフォームといます。エッジ、ブローでは出せる技は微妙に異なります。》

ユ「爪と拳…ヤベエ…キタよ俺の時代！」

スゲーヤベエよ！かつこいいいしイカシてる！赤と金の装飾が何とも

…

サ《さて、これから戦闘について説明しますね。マスターは魔力ではなく、”授天力”^{エネルギー}と呼ばれる力を使えます。属性はバージョンに

より異なります。》

ユ「さしずめこのバージョンは炎、だろ」

サ《…！…すごい！わたしが言う前に理解してしまうんですね さすがマスター！…戦いかたは分かります？》

ユ「大まかにはな！…よし、技の確認から始めようぜ！細かい設定よろしくな！」

サ《いい忘れましたが…わたしにはカートリッジシステムに酷似した”装填”システムが有ります。》

ユ「装填システム？カートリッジシステムと同じでもそれが魔力が授天力かってところか？」

サ《…すごい…すらすらと吸収していきますね…では！実際に技を出して見ましようか！》

さあて、楽しくなってきたぜ！

第8幕「自分の能力確認を怠らないように、予想外だったりする」(後書き)

その頃、学校のなのはは…

なのは「…!!」「ユーノ君…今の魔力は!?!」

ユーノ「わかんないけど…もしかしたらユウタって人かも知れないね!モニターで見てみるよ!」

なのは「…ぶう〜!!ずるいの!」

ユーノ「し…しょうがないでしょ!?!なのは、終わったらきちんと映像見せるから、ね?」

道場。

ユウタ「…?何か覗かれてる!?!誰だよ俺のこんなん見てるやつあ!!…気のせいかな?」

サンライト《うーん…私も嫌な目線を感じます。》

ユ一ノは何を見たのか!?
次回を待て!

此処等で主人公設定発表するか…ネタバレ注意BY作者 優氣凛々(前書き)

作者「まあ今さらだけでも」

ユウタ「まあ、いいか。今回は真面目だからな。」

作者「作者は筆記試験まだ引きずってます。不定期ですが…楽しく読んでくれたらな…と…」

ユウタ「…受かれよ！応援してっから！／＼／＼／」

作者「ユウタがデレた！…我が子は可愛すぎて禿げるうう？(バ
タツ」

血の海になりました。

此処等で主人公設定発表するか…ネタバレ注意B Y作者 優氣凜々

() …転生後

「」…読み方 とします

主人公 御神 ユウタ「おがみ ゆうた」

年齢：19歳（9歳）

性別：男（男の娘）

身長：168？（130？）

体重：70？（30？）

容姿：黒髪でツンツンにしている。メガネ着用。そこそこイケメン？眼は両目黒い。体は適度に引き締まっている。

（白髪で肩甲骨まで伸びている。左前髪に青いメッシュをいれている。かなりの女顔、かなりの美形。眼は右が黄金、左が紅蓮。体も中性的で、くびれているせいでかなり女らしい。でもかなり鍛えているため引き締まっている。）

能力：空手と柔道。両方かなりの段もち。（小説内のキャラクターの力を使える能力。身体能力アップ++）

特徴：パラレルワールドの地球で神 エリリイの手違いで殺られる羽目となり、お詫びにと「リリカルなのは」の世界に転生した。時間枠は無印後A's手前。性格は優しく厳しい兄的な性格。そのお

陰で小さな動物や子供に良くなつかれる。

しかし、転生前に苛めを受けた影響で、あまり人を寄せ付けようとならない。ただそんなクールな一面に乗じて無意識なフラグビルダーとなる「年を問わずフラグビルダー」。神的鈍感。

何とかこのまま自分の世界に帰れないか試行錯誤している。

空手は5段、柔道は6段を有する御神家一瞬発力と体力が高い超人他にも剣もかじっている。

現段階で使えるバージョン、フォーム

〔version、H〕

ブローフォーム技

・焰拳：炎を纏った拳を打つ。「装填」一発で倍の威力。

・爆龍拳：炎を纏った拳を打ち、更に爆発を加える。焰拳と同義。

・劫焰灼掌：体に授天力を巡回させ、身体能力を格段に底上げし、目に見えない打撃を繰り出し、踵落としを叩きつけ、剛速で地面に墮ちる。「装填」二発技。

・コロナ・ブリッツ：手に授天力を溜めて相手に擦り込み、体内にダメージを与える。「装填」一発技。

・コロナ・バースト：授天力を収束し放つ砲撃。威力はなののはのデ
イバイン・バスター並み。

・ネオ・コロナ・バースト：コロナ・バーストの数倍の威力。なの
はのスターライトブレイカー並み。「二重装填」二発技。

・砲閃火：火球を生成し相手に叩きつける。今のユウタは1000

0発まで可能（二重装填一発使用時）。

・龍星群：コロナ・バーストを複数繰り出して相手を潰す。「二重装填」二発分で5個。

・龍星破群：ネオ・コロナ・バーストを複数繰り出して相手を消し去る。「最終装填」使用時。

語句の確認

授天力：ユウタの力。神と契約し、神の力の一部を使用できる。ユウタは天空神「アマテラス」と契約し、太陽の力を従える。

「装填」：カートリッジシステムの授天力盤。片腕のみ。

「二重装填」：カートリッジシステムの授天力盤。両腕のグローブのカートリッジ部で行う。「装填」片腕につき三発まで可能。

「最終装填」：両腕全て装填三発消費する。

サンライト

AI性別：女

種別：授天力専用インテリジェントデバイス

性格：お姉さんのな性格。

モードは現在バージョン / H

ブローフォーム：グローブ
エッジフォーム：爪、猛禽類のような爪。

のみ。エッジはあまり使わない。

【御神家の人々】

御神 サキネ（21歳）

性別：女

身長：152？

体重：…潰すよ？（黒笑）

スリーサイズ：上から73、52、86

容姿：茶髪でボブカット。可愛いアイドル系。

特徴：ユウタの生前の姉。ユウタにベタ惚れ。ヤンデレても可笑しくない。格闘技に精通していて、男のユウタに破壊力だけは勝っていた。主に脚技がすごい。性格はまさに姉貴的な性格。優しく諭すのが得意。怒ると鬼のようだが：ユウタにはかなわない。"ユウタは実は怖い。

御神 カツリ（17歳）

性別：男

身長：170？

体重：90？

容姿：茶髪で後ろを縛っている。顔はイケメソ。ガチイケメソ。ユウタに羨ましがられるが、ユウタの方が整っている。

特徴：ユウタの弟で末っ子。ユウタを尊敬し、サキネの駒扱い。大概ユウタの救いの手が伸びる。性別はわんぱく、無邪気な笑顔が似合う。プロレスをしているので、ユウタの瞬発力を消してパワーに転じた感じ。因みにパソコン等電化製品の知識なら誰にも負けない。

御神 エリカ（41）

性別：女

身長：154？

体重：エリカタツクル

スリーサイズ：上から99、52、89

容姿：茶髪でのほん系のロングヘア。腰までで先の方を少し力
ールさせている。

特徴：言わずもながユウタ等の遺伝子の元、母親。性格は天然での
ほほん。料理の腕がたち、栄養士の資格を持ったため、ユウタ等の食
事バランスは。因みに薙刀のプロである。

御神 ユウト（41歳）

性別：男

身長：182？

体重：76？

容姿：黒髪でショートカット。かなり渋イケメソ。右目に傷がある。

特徴：ユウタ等の遺伝子の元、父親。性格は冷静だが、父親らしい

包容力がある。教訓めいたことをいい、若き少年少女を導く。エリカにデレデレで、新婚同然。剣を扱わせたら右に出るものはいない。愛刀は「枝下桜」道真”「

他は後々出したら説明します。

第9幕「学校へ逝こう！〜え？字が違つ？気にするな〜」（前書き）

長らくお待たせしました？

更新できなくてすみません？

能力説明はまた今度纏めてやりますので…本文中にもちらほらさせますが…

どうか生暖かい目でみてやってください？

第9幕「学校へ逝こう！〜え？字が違つ？気にするな〜」

やあ！みんな元気かい？ハッピーかい？

毎度お馴染み、最近自分が恐ろしく思う御神 ヌウタだ。

何で恐ろしいかって？

いやさ…修行してたはいいんだよ？いいんだけど…

〜〜〜回想〜〜〜

ユ「はああああありやあああああ！〜！！」

今俺は、一心不乱に>焰拳<を特殊なサンドバッグにたたみかけてる。>焰拳<は見た目炎を纏った拳何だが、炎はブースターみたいな役割を果たしているため、速くて重い一撃なんだよ！すげえだろ！？漢のロマンだろ！？

サンドバッグは授天力でコーティングされてるからちよつとやさこらじゃ破けない造りになってたりする。（因みに5個目）

ユ「だありやあ！〜！！」

そんなサンドバグに焰拳をちよつと強めに放つ。衝撃でお互いの間に隙間が開く。これが俺の作戦なんだよ

ユ「(サンライト!二重装填一発!)」

サ《分かりました!二重装填!!》

ドギユンドギユン!と音をたてて両腕のグローブに装填された。そしてすかさず火球を作る。その数、軽く200くらいかな?それをサンドバグ目掛けて放つ!これまでに掛かる時間は2秒。

ユ「喰らえええ!>砲閃火く!!!」

ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド!!!.....!

見事に決まった...なんというか...数の暴力だよな...

サ《ま...マスター...》

ユ「言うな...分かってるから...」

そこには...半分が跡形も無くなった道場の広大な景色があった...

ユ・サ「《もう道場でこれは止めましょう...》《止めよう...》「

~~~~~回想終わり~~~~~

…とまあ…いろいろありまして…てか、火事にならなくて良かったわ…

とにかく、午前中にそんなこんながあつたせいで午後は道場を能力で治しました。え？紹介にかいてない？知るかよ…「小説内のキャラクターの力を使える能力」なんてニアチートなものを書けつてのが難しいわな…だけでも俺は魔力はBくらいしかないよ。授天力がその分強いのかな？因みに道場を治した時の力は授天力だよとりあえず、基礎は固まりました、丸。

サ「マスター？マスター？ねえマスター！わたしの話を少しは聞いてくださいよ？」

ユ「…はっ！すまない！変な電波流れてた。んで？なに？」

サ「マスターの通う”ガッコウ”の制服、出したついでに着てみましょうよ！！」

そう、今は夜。子供が寝る時間（ユウタ感覚では8時くらい）である。時間省略は…お約束だもんね

んで、明日から通う「聖祥大附属小学校」なるところに出陣する支度をしてたんよ。丁度制服をハンガーにかけてるんだが…

今の俺の服装は寝間着のワイシャツのみ。動きやすいし、解放された気分になる。

ユ「明日着るから明日な！ドキドキだよ…転校かあ…友達はまたできないと仮定するか。」

3年に転入するんだが、おそらく既にある程度のグループになってしまっただろうところに入れば…分かるだろ？察してね？

サ「その悩む姿…とても子供には見えないくらいりりしいですよ…  
マスター／／／」

ユ「ありがとう。…明日頑張ろう！おー！」

…翌日の朝…

俺は今、もう一度小学生をやり直すべく制服を着ていた。

セーラー風な上着、色は白を基調として黒のラインが入っている。

下は短パン。これも白を基調としている。ただどね…短パン嫌いだったから改造して七分丈にしちゃったZE

俺の考えていたこんな家庭的な能力がこんなところで開花するとは…考えてて損はなかった！

因みに能力名は「スライドアウト質量維持拡張能力」。素材の質量や強度をそのままに引き伸ばす能力。だけど、引き伸ばすはいいけど縮められないし、人体には使えないのがいたいな…身長伸ばせたのに…

因みに能力説明はまた今度纏めてやるらしいぞ？



まあ良いや

とりあえず今から俺も小学生！前の人生ではさんざんだったから今回  
回は頑張ろう！

サ《ま…マスター…可愛い／＼》

それと皆様に朗報ですよ

サンライトが昨日からおかしい…あからさまにおかしい…

もしこいつがデバイスじゃなくて人だったら…私は確実に息の根を  
止めなければならぬ。サンライトの。

そんなこんなで学校へのバスを待つためにバス停へ。

弁当持参らしいから朝3時くらいに起きて作ったZ E

…へ？起きるの早い？年寄りは大抵早いだろ？精神年齢80だなん  
て伊達に言われてねえよ

？「あ！！ユウタ君なの！」

ん？どこかで聞き覚えが…

ユ「ん？って高町か。おはよう！」

そう、朝からツインテールピコピコさせてる高町 なのはがいた。  
同じ学校とは…神様が何かしたか？

(ふえええん！何でユウタに女の子が近付いてるんですか！？許せないので！！Byエリィ)

ユ「高町も聖祥大附属の小学校なんか？」

な「うん！！ユウタ君は今日から？／／／」

ユ「ああ。まあ…同じクラスだったらよろしくな。」

な「よろしくなの！（ユウタ君…制服可愛いの／／／）」

何か空から声がしたり場違いな考えをしたりしたんだが…

幸先わりいな…だけど、転入前に夕チになれそうな子がいて良かった！

ユ「そっいゃ…高町。」

な「何？ユウタ君？」

ユ「制服可愛いな。似合ってるよ。(ニッコ)」

な「／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／あ…ありがとっ  
なの／／／」

ん？正直な感想言っただけなのに…熱か？今は季節的には夏初め何  
だが…確かにちと寒いか？

ユ「高町、夏風邪は質が悪いから気を付けろよ？」

な「う…うん（うーん…にぶちんさんなの！／＼ユウタ君の方  
が質が悪いの／＼／＼）」

サ《（…前途多難ですね、マスター…）》

第9幕「学校へ逝こう！〜え？字が違つ？気にするな〜」（後書き）

〜次回予告〜

次回！第10幕「学校へ逝こう！！〜暴君少女とメカオタク予備軍〜」

ついにアリサとすずかが出ます！

ユ「俺の夢？それはな〜…」

次回をまてい！

第10幕「学校へ逝こう!」2「暴君少女とメカオタク予備軍」(前書き)

遅くなりました?

アクセス数5000越えたので何か番外編やりますので…楽しみに  
待ってください!

第10幕「学校へ逝こう！！」暴君少女とメカオタク予備軍」

やあ！！みんな元気かい？ハッピーかい？

何度も諦めず同じ台詞を吐き捨ててる小学生になった御神 ユウタ  
だ。

今俺は、学校へ向かってるバスの中何だが…

？「私はアリサ！アリサ・バニングスよ！なのはから話は聞いているわ。」

？「月村すずかです！なのはちゃんから聞いてたけど…ホントに男の子？」

上から、金髪？を手で払っていかにもセレブですけど？というオラ全開のアリサ・バニングス。勝ち気な感じだが、悪い子ではなさそう。

下は、紫色の髪に黄色のカチューシャと、なかなか良い色合いのおとなしガールの月村すずか。積極的ではなさそうだけど、元気いっぱいだから心配要らなさそう。さらりと酷い。

ユウ高まつちゃんから何を聞いたか知らないけど…まあ自己紹介が省けて助かった。御神 ユウタだ。よろしくな。」

な「にゃ！？高まつちゃんって！？なのはだよ！！私はユウタ君っ

て呼んでるよ!？」

ユ「まあまあ…そんな急には呼べないから、許せよ？」

ア「まあ良いんじゃない？私達はユウタって呼ばせてもらってるから。」

す「うん、私もユウタ君って呼ばせてもらってるね？なれてきたらでいいから名前で呼んでね？」

ユ「わかった。…で？聞き分けが悪いのはお前だけだぞ？高まつちゃん？」

な「うゝゝゝ!!分かったの!でも高まつちゃんはやめてよゝ!？」

ユ「無理に決まってるだろ？良いじゃないかチャージングで。」

な「どこがなのゝゝ!？」

楽しい学校生活になりそうな予感になった俺だった。

学校に着いた。第一印象…でかすぎ!意味わからん!さすが私立と  
いったところだな!

そんなことを思いつつ、アリサ達と別れ、職員室を目指す。

.....職員室.....

ユ「失礼します。今日から転入する御神 ユウタですけど……」

一番手前の女の先生が手を降っていた。

先「ユウタ君ね？私が担任の那由多よ。よろしくね？」

ユ「はい！よろしくお願ひしましゅ……………」

先「……………大丈夫、誰にでも失敗するときはありますから……」

ユ「ううう……………／／／／」

そんなユウタをみて「何この可愛い生き物は／／／」と職員室の先生方が思ったのは余談だ。

.....廊下.....

やあ…御神 ユウタだ。

転校なんて初めてだから緊張するぜ…しかも職員室の先生方全員顔



真っ赤にしちゃって…どうしたんだろ？

あれから色々ありまして、今教室のドアの前にいるんだよ…緊張で  
心臓が口からこんちわわ…！しそっ…

先「それじゃ、入って来てください！」

いざ…戦場へ…！！

ユ「えと…今日から転入することになった御神 ユウタです！よろ  
しく願います…！！」

第10幕「学校へ逝こう!」2「暴君少女とメカオタク予備軍」(後書き)

ア「ちょっと!なによこの”暴君少女”って私のこと!?!?!?しかも言うに事欠いて出番少ないじゃない!?!?」

す「メカオタク予備軍…作者さん…カクゴデキテルカナ?」

その日作者は幼女二人になぶられ「あ ああ?」「…ごめんなさい?」

第11幕「学校へ行こう〜」なのはの秘密と俺の力〜」（前書き）

作者「ごめんなさい！…！更新できなくて！」

ユウタ「そつだそつだ！ず〜と放置しやがって！グレるぞ！」

作者「お前！俺だ、つまりお前は…！」

ユウタ「それ以上言つなあああ！…！」

サンライズ《始まります！》

第11幕「学校へ行くところ」なのはの秘密と俺の力」

やあ、みんなハッピーかい？なかなか長い時間放置されて無駄な時間を過ごした御神 ユウタだ。

さて、今は……

男「なあ、今までどこに住んでたんだ？」

ユ「まあまあ遠いところ。」

女「趣味はある？」

ユ「体を動かすこと。読書も少しは……家事も出来るぞ？」

男「さつきから気になったんだが……俺」って普通女の子使わないよ？」

ユ「やかましいわ！俺は男だっつの……！」

クラス「え〜！！！！？？？？男の子！？」

質問に自分なりに答えてました。しかし、かなりの女顔なのね……  
お兄さん困るなあ……………年齢的にはまだまだガキンチョだがな……

ア「あんたすごいわね…普通転校生ってあたふたするものよね？」

お、バニングスさん…だっけ？呼びづらいよなあ……………そうだ！

ユ「まあそれは所詮」「こていがいねん」「ってやつさね”バニス”」

ア「ば…バニスって誰よ！？／／／／」

ユ「バニングスって長いだろ？呼びづらいことこの上無いんで、  
バニス””って略してみたんだが…ダメだったか？」

ア「…………別に…嫌じゃ…………無いわよ／／／／でも！私はユウタって  
呼ぶからね！！／／／（何よこれ…………心臓辺りがドキドキしてる…  
病気…かしら？／／／／）」

バニングス、もといバニスは顔を真っ赤にして席を外していった。  
…………最近の風はしつこいらしいな…手洗いしなよ？  
お兄さんの…………約束だぞ

す「ユウタ君って、あだ名つけるの好きなの？」

すると月村さんが俺の顔を覗いてきた。髪の毛さらさらで綺麗だな

！なんか感心。

ユ「俺は誰がどんなことをする奴かを目で見極めてんの。相手の目は内面を見るための一番のファクターなのだよ？」ツッキー」？「

す「ツッキー」？「

ユ「そ。」ツッキー”。月村だからツッキーだ。質問に真面目に答えるなら、あだ名を決めた方が親しみやすいし。仲良くしたいって証明したいなもんだよ？「

ツッキーの顔が真っ赤になった。

そっぴやなんか…男子からの視線がひしひし痛いんだけど…

す「そ…そうなんだノノノいいね！こだわりがある人って（ユ  
ウタ君って…かっこ可愛いなあ（

ユ「まあ、ただの独りよがりな気がするがよ…」

な「そんなことないの！ユウタ君って立派だなあ」

ユ「突然ビククリすんな高まつちゃん！？」

いきなり高まつちゃんが話しかけてきた。相変わらずツインテールがピコピコしてんな…すげ…

な「なのはだけ仲間はずれは嫌なの〜 だからユウタ君とも仲良しするの!」

ユ「仲間はずれにはしてないが…まあ、楽しければ何でもかんでもモーマンタイだぜ!」

俺は高まつちゃんに笑顔を見せた。なのはも笑顔で返してくれた。

な「うん!!!」

しかし、俺は…

ユ「バカ抜かせ。俺が立派ならみんな立派を通りすぎて天才だよ…」

みんなが話しかけて来ているのを聞き流しながら一人呟いた。

「なのはside」

な（やっぱり、リンカーコアがあるの……ユウタ君って…魔導師な

のかな?)

私はユウタ君に会って話を聞いた時から薄々気づいて、少し接近して様子を見ていました。

正直、分かりません。

リンカーコアがあるのはわかるんだけど、ランクが解らないよ……  
にゃああ……

なのは「今日…聞いてみようかな?」

これは本人に聞かなきゃ駄目みたいなの……

side out)

まあ色々なことが起きてただいまショートホームルーム(SHR)  
やって放課後だ。

小学生レベル…くそみたいに簡単だったな…

そんなこんなで、今は…

ユ「ん?今から俺んちに?良いけどきちんと”桃ちゃん”か”しろ  
ん”に言っただぞ?」



な「し……」しろん”がお父さんで……”桃ちゃん”ってお母さん……だよね？「

ユ「ん！そゆこと！」

何でも、高まつちゃんが「俺んちに行きたい」らしくて、バニスとツッキーは習い事だそうであれないから高まつちゃん一人なんだとか。……まあ、近頃幼児を狙った悪質な犯罪もんがはびこってますから……帰り一緒だし、いいか。

な「わかったの！！じゃあ、一緒に帰る！！」

瞬間、男子からの目線がひしひし痛くなりました。理不尽だぞバカヤロー……

てな訳で、今日は高まつちゃんと帰ることになりやした。

ただ、何でも無い路面で転けそうになっかね？

帰りだけで三回は地面と熱烈キス未遂があつたぞ！

あと、助けてやる度に顔が真っ赤になんのはなして？

な「うわぁ…広いの！」

んでもって到着。高まつちゃんは何か広いのゝなんて言ってるが、  
広いのじゃない。ム・ダ・にだだっ広いんだよ！

ガラガラ……

ちなみに扉は全てを横に引くタイプな？

ユ「まあ適当に上がってな？」

な「お邪魔します！！！」

とりあえずお茶出さねえとな！

俺が愛用してんのは和室なんだ。だから高まつちゃんも和室に招待  
した。

今日は温かい烏龍茶だ。風邪にもってこいなやつな。上手いんだ意

外に

お茶づけは…白玉だ。あんたつぷりの甘いやつ！  
全部お手製だぜ 伊達に19年生きてないぜ？

ユ「はいよ、店の洋菓子もなかなかだがな…和菓子も乙なもんだ  
ぜ」

高まつちゃんは目をキラキラさせてんな！なかなかいい反応だ！

な「うわあ、美味しそうなの！いただきます」

はむっ！

ユ「うまいか？白玉。」

な「ん〜 おいひいのお」

作り手冥利に尽きるぜ！嬉しいな

しばらく高まつちゃんと俺は白玉と烏龍茶に舌鼓していた。

ユ「で？なして俺の家に来たん？」

とりあえず、何で来たのかが解らないと埒が空かないからな…

高まつちゃんが突然真剣な眼差しになった。…何か似合わないな…

な「ユウタ君って……」魔法”って信じてるかな？」

ユ「……………ハハ〜ン…成る程な……」

多分高まつちゃんは俺のリンカーコアに気がついたけどモヤモヤするから聞いてみた訳か。

ユ「多分高まつちゃんは俺のリンカーコアに気がついたけどモヤモヤするから聞いてみた訳か。」

な「にや！？わかってたの!?!」

おっと？もしかしたらもしかしなくても…

ユ「まさか思ったこと口ばしたか??」

な「それはもうおもいきり呟いてたの!?!」

…どうやら俺はこっちに来て天然ボケが入ったらしいな……

ユ「はあ…まあ正確にはリンカーコアはあるよ。ランク？…強さ的にはデバイス曰く”Bランクくらい”らしい。てかランクってなんだよ？」

な「にははは…実を言う私もランクに関してはあやふやなの…でもユウタ君ってデバイス持ってたんだ！」

俺は高まつちゃんに腕輪を見せる。

ユ「ああ、サンライズって言うんだ。サンライズ、高まつちゃんに挨拶しな。」

サ《……》

あら？サンライズから言葉が出ない…故障ああああ「マスターがマスターがあ…」k確実に故障だなこりゃ。

サ《…はっ！も、申し訳ありませんマスター！貴方の職員室での出来事をリピートしまくってオカズにしたら意識が飛んでました！》

ユ「うん、意識のみならず本体ごと飛ばしたるかワレエ！気持ち悪いわー！！」

サ《すみません。でも……可愛すぎるマスターもいけないんだぞ》

な「な……なかなか濃いAIのデバイスなの……あつ、こつちが私のデバイス”レイジングハート”!!」

俺の目の前に赤い球が浮かび上がってにわかにな滅した。

レ《初めまして、レイジングハートと申します。以後お見知りおきを、ユウタ様。…サンライズ、少し落ち着きなさい…》

なんて優しいデバイス…サンライズに然り気無く注意を……おじいちゃん感激!

サ《レイジングハートさんはまだマスターの超プリチーな魅力に目覚めて無いです!目覚めてしまえば、目覚めさせてたまるか!!》  
「…いけず…」

全く見習えよサンライズ!えらい違いだろうがあ!

ユ「高まつちゃんも魔法、使えるんだな!」

な「うん!!今は命中率と正確性を鍛えてるんだよ!!」

両手で握りこぶしを作ってガッツポーズをしている。子供らしいな。

ユ「ならば、一緒にトレーニングしないか？」

な「ふえ！？ゆ…ユウタ君と…？」

ユ「ああ！一緒なら一人よりいい修行が出来るよ！…駄目か？」

俺は寂しくなっつてうなだれてしまった…高まっちゃんは少し慌てていた。

な「駄目じゃないよ！一緒…一緒に修行、しよ…！！」

俺はガバツと顔を上げた。今、ものすごく笑顔になっているにちがいない。

ユ「ほんとか！？ありがとう！！嬉しい！」

な「っ！！！！！！！！／／／／／（か…可愛すぎるの〜！！）」

そして、次の日から高まっちゃんとの修行が始まった。

第11幕「学校へ行こう」なのはの秘密と俺の力」（後書き）

おまけ

な「サンライズさん、その職員室での出来事の映像、レイジングハートに送れないかな？かな？」

レ《ま、マスター！？》

サ《出来ますとも！高画質で送りますか？》

な「うん」

レ《…ユウタ様、同情を禁じ得ません……あと、マスターの代わりに詫びを…ごめんなさい…》

ユ「レイたん”、苦労してるな…”

レ《レイたん？》

ユ「ん！レイジングハートって長いだろ？呼びづらいつつの上無いで、”レイたん”で！しかも女の子の可愛さを引き出すし…」



レ《…：…／／／サンライズ、映像を…》

サ《はい！！》

ユ「あるえええええ！？レイたん！？」

第12幕「修行開始とビデオレター」ユウタとフエイト」(前書き)

作者「グダグダは抜けないが、少しは読み応えが増えたので読んでみてちょ?」

第12幕「修行開始とビデオレター」ユウタとフエイト」

チユンチユン……チチチ…

鳥の囀りが響き、空気が澄んでいる朝、しかも早朝。

御神家の道場では……

な「アクセルシューター!!」

レ《アクセルシューター、セツト!》

高まつちゃんが一つの魔力球を作りだし、道場の天井に向けて缶を  
放り投げ、

な「シュート!!」

缶に向けて魔力球を放つ。しかも一発では終わらず、何回も、何回  
も…

レ《23、26、30、34…》

…レイたんが数えてらっしゃいました。

レ《48、50!》

な「アクセル!」

50回目を終えた瞬間に、高まつちゃんの魔力球のスピードが速くなり、缶にあたる回数も格段に上がる。高まつちゃんの表情が険しいあたり、コントロールが辛いんだね。

レ《68、75、86、98、100!》

100回目は高く缶を打ち上げ…

な「ラスト!」

ガン!ヒュウウウウ…カン!カランカラン…

な「あつうううう…」

ラストに魔力球で缶を道場の真ん中のゴミ箱に入れようとして、カ

ンがハズレ、缶が落ちた。……寒……

な「まあまあ上手くいったんだよね……」

レ《だいたい80点くらいです。かなりの命中率ですよ。》

な「ありがとうレイジングハート！……えと、ユウタ君は……」

俺？俺はお前見たいに遠距離攻撃派では無いから……

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ！！！！

ユ「ハアアアアアアアアアアア！！！！」

サ《授天力値上昇！サンドバグ保護授天力付加最大限！！》

炎拳でパンチを切り返し……

ユ「ハッ！！！！」

ガシャァン！！ジャララ！！

サンドバッグと俺の間に空間ができた。隙に左手に授天力と魔力を  
8：2で混ぜた力を込め…

ユ「サンライズ！装填一発！！！」

サ《装填一発！！》

ガシャ！！

ユウタの左手のガントレットにあるカートリッジシステムを起動、  
一発薬莢が吐き出された。

そして俺は、溜めていた力を一気に吐き出す！

ユ「喰らえ！「爆龍拳」！！！」

ボスウ！！！！ボアアアアアアアン！！！！…サアアア…

吐き出した刹那、サンドバッグを貫き、サンドバッグを爆破させ、  
砂が流れ落ちた。いやあ…これが人なら……おえ…

な「ユウタ君…スッゴいの！！！！／／／／（横顔がかっこよかったの

…／／」

サ《これぞ！私とマスターの愛のk「言わせねーよ!？」…ニブチン…／／》

レ《……／／(さっきの横顔…記録しました……／／秘匿級のセキュリティを…／／／)》

…最近俺の身の回りから危険臭がするんだが…気のせいかな？

シャワーを浴びて汗を洗い流した。ちなみには朝の6時くらいかな？

高まつちゃんは「一端帰るの!」って言って帰って行った。なんだかんだでやっぱり友達同士家が近いといいもんだな…

てか「一端」てなんだよ…

ここは俺んちだろうがよ…高まつちゃんはちげえだしよ？

ハア……そついや、高まつちゃんにやらなきゃならんものがあった

な…

結局こねえし……

仕方ないし弁当包んで学校に出陣致しますか…

ユ「おっ、うお〜い高まつちゃん〜!!」

な「ユウタ君!!改めておはよう なの!!」

なんと、高まつちゃんがバス停で待ってたよ……さっきの意味ありげな発言は違うんかい…

ユ「さっき一端って言ったろ!?待ってた今までの自分が恥ずかしいわ!!」

高まつちゃんはそれを聞いていい気になったのか、

な「もしかして〜…期待してたの?」

なんてにやけながらいつつ顔を近づけてきたから……やり返すしか無いな、やり返すよな?やり返せって?しかたねえな……

ユ「天誅〜」



バチコーン！！！！

な「にゃあああああ！！！！」

てな訳で、デコピンしてやりました。

な「ふえええええ…いたあい…」

高まつちゃんはさつきから額を押さえながら踞っている…  
そついや、まだ要件を済ませてなかったな！うっかり八兵衛だ。

ユ「高まつちゃん、手、出してみそ」

な「ふええ？」

高まつちゃんは涙目で上目遣いしながら首を傾げて手を開いて俺の前に出した。

うん、年相応の可愛さだなあ…

え？なんか反応ドライだなんて？

…俺にこいつはもったいねえよ…

カサツ…

俺は高まつちゃんの差し出してきた手に一枚の紙を置いた。

な「う？なにこれ、ユウタ君？」

ユ「開けてみな！」

高まつちゃんはおそろのおそろの紙を開く。

おそろのおそろで…何もしてねえよ…

な「あ……………これって……………

電話番号と…アドレスかな？」

ユ「そ！俺の携帯のな！」

な「ユウタ君の……………携帯！？」

俺はポケットをまさぐって黒い携帯電話（DOCCOMOF・06 B）を出した。高まつちゃんの目が何故かキラキラしていた。

な「わああああ……………ユウタ君の携帯カッコいいの〜！／／／（白い髪の毛に黒い携帯……………似合いすぎなの／／／）」

ユ「まあな 俺、携帯はスライドしか使わないからさ！スタイリッシュだろ？」（…しっかし…生前の携帯がこっちにきたから驚きだ…）

「

実はこの携帯は前世に使っていたもので、何でかデータそのままに  
来た。（19歳ならではのあれな画像や動画は抹消されていた…  
その代わり携帯でパソコンハッキング出来るよ…）

な（ユウタ君のメールアドレスと電話番号……何か一気に自分の携  
帯がいとおしくなったの／＼）

106

「飛んで放課後…」

何？いきなり王の紅蓮するなって？まあまあいいじゃん？  
今に始まって無いだろ？こんなこと！

で、SHRも済ませて、いざ我が家へ！…と洒落こむつもりが…

ア「ユウタ！ビデオレター撮るわよ！！！」

ユ「何で？俺は関係n「なくないからいつてんの！！」わかったわかった！だからと言ってバニスよ、なぜ身構えた！！完璧にタックルかますつもりだったろ！？」

見ればバニスがアメフトよろしくセツト！的な格好でこちらを逃がさんとばかりににらんでいる。

人生経験上ああいうのには従わないと痛い目見る…しかたねえな…

ユ「じゃあないな…で？誰にだよビデオレターって…？」

ビデオ”レター”だし誰かに贈るんだな…でも、このクラスには入院したりしてる奴はいないし…宛がねえよな…

す「名前はフェイト・テストロツタちゃん。外国にいるのはちゃんのお友達！」

な「うん（ユウタ君聞こえる？）」

うお…！？いきなり高まつちゃんの声が脳内に…高まつちゃんはテレパシー少女だったのか？

な「（これは”念話”って言うの、ユウタ君心のなかで念じてみて

なのー!」

ユ「(ユ…ユウつか?)」

な「(うん 上手いなあ…でね?ユウタ君には言っておきたいんだけど…)」

高まつちゃん、その先はなんとなく察せるぜ?

ユ「(魔法関連か?)」

な「(うん…)」

ユ「(わかった。詳しくは後でな メールでも構わないよ?)」

高まつちゃんの顔があからさまに笑顔になる。やっぱり元気な子供は笑顔が基本だ!!!

そこ!俺が同年代だからおかしくね?って思ったろ!?  
精神年齢は自称80歳だ!!

しかし、子供は同時に無邪気だから…

な「わかったの！ユウタ君、後でメールするね！！！」

ア、す「ユウタ（君）とメール！？」「」

…空気を察せる人なら分かるだろ？あの高まつちゃんが無邪気に念話解いてポロリと口に出したから…何故かバニスとツツキーがすごい勢いでこっち見てるよ……齡80歳の神経でも…怖い…

ア「ちよつと！！け…携帯持つてるなら私…たちにも教えなさいよ！！！！／／／」

す「ユウタ君……駄目かな？／／／」

バニス落ち着け、あとツツキーはその年でなしてそんな艶やかな声出せんの……他の男子にやったら明らかにあれだよな？

ユ「バニス落ち着け、あとツツキーはその年でなしてそんな艶やかな声出せんの……他の男子にやったら明らかにあれだよな？…って、ありゃ？」

目の前にいたお二人さんが固まってる……また俺、思ったことを口に出したか……

するとツツキーが近づいてきて……耳元で…

す「大丈夫だよ……こんな声……ユウタ君にしか聞かせないから／＼」

耳元……み……耳元は……俺弱いんだよ……  
くすぐつたいのを一生懸命堪えてたんだが……

三人＋ 「」『／／／／／／／／／／／／／／』「」

何で顔が赤いの三人とも……

とりあえず、バニスとツツキーにメールアドレスと電話番号を送り、後にメールを俺に送ると言うことになった。

ところ変わって管理局

時空艦アースラ……数多の時空を管理する”時空管理局”の艦。

そんなアースラの部屋の一つに、フェイト・テストロッタが勉強をしていた。

フェイトは”魔導師”だ。先の”プレシア・テストロッタ事件”の重要参考人として滞在中の身分。しかし、罪は無いとのことだから、雇われ傭兵の”委託魔導師”を目指して日々努力していた。  
すると……

プシュ……

リ「フェイトちゃん、なのはちゃんからビデオレターが来たわよ」

フ「あ、リンディさん！」

扉からアースラ”艦長”リンディ・ハラオウンが入ってきた。エメラルドグリーンの髪が綺麗な女性だ。リンディはなのは達が撮ったビデオレターを持って来ていた。

ク「すまないな…こんな形でしか会えなくて…」

エ「仲よしだね」

そして、リンディの後ろから、黒髪のショートヘアのクロノ・ハラオウンと茶髪のショートヘアのエイミィ・リミエッタが顔を出す。

フ「クロノ、エイミィさんまで…どうしたの？」

リ「実は、『このビデオレターはぜひリンディさん達も』って書いてあったの。だから一緒にみましょ？」

フ「フェイトはとて面白い笑顔になった

フ「はい…！」



くビデオレターく

な「フェイトちゃん久しぶり！高町なのはだよ！！今日は、新しい友達を紹介するね！！」

- - - - -  
フ「新しい友達…どんな子…か…！！！！」

ク「んな！！！！！！」

リ「あらあら」

エ「かわいいく…！！」

- - - - -

ユ「初めまして…私はk「あなたはからかい過ぎよ！！」

バシン！！！！

いたっ！！！！バニス！！！！痛いだろうが！！！！」

ア「きちんと挨拶くらいしなさい！！！！」

ユ「わかってるってば…御神 ユウタだ！…友達は今のところなのはただけだ！…友達に…なるうぜ！」

第13幕「KIZUNA」戦いを通してつながるもの」（前書き）

作者「なかなか上手く書けん…」

ユウタ「いつもどーりだな〜」

作者「そっぴや、ユウタちゃんよ。最近な、この作品におけるいわゆる”テーマ曲”を決めたのだよ！）、）、（キリッ」

サンライズ「考えるなら少しくらい内容に回しません？」

ユウタ「まあ、一応聞いとくか。」

作者「仮テーマ曲は”アンティック・珈琲店”の”スノーシーン”だ<（^・<）キラーン」

ユウタ「言うだけならまだしも、何ゆえ寒いのか？」

作者「何故なら…俺が…寂しいからさ）、）、（？ハア…」

ユウタ「…頑張りたまへ…」



### 第13幕「KIZUNA」戦いを通してつながるもの」

やあ、みんな元気かい？ハッピーかい？最近出番多め＋何故か体に精神が引つ張られ始めつつある御神 ユウタだ。

あれから数日後、今日は学校が休みだ。…かといってやることなんてこれっぽちも無いから、とりあえず体を鍛えるために走り込みをして、今は道場にいたりします。

ユ「時間制限10分！どちらかが撃墜されるか、武器を取られたら負け……いいな！」

な「ユウタ君：負けないの！！」

今、まさに一触即発な空気になってるのは、これから高まつちゃんとの模擬戦をしようとしているからだ。  
魔法の扱いに慣れてる高まつちゃんに対して、近接的な技術しかない俺…正直負ける気しかない……

ちなみにレイたんの合図で始まるんだ。

レ《マスター、ユウタ様、よろしいですね？》

ユ「さあ……行くぜ!!!」

な「……!!」

今…

火蓋が

レ《3…2…1…始めっ!!!》

落とされた!!!

ユ「行くぜ!!!」「砲閃花」!!!」

な「手始めに…」「アクセルシューター」なの!!!」

俺の周りに8つの火球が、高まつちゃんの周りに桃色の魔力スフィアがうかんでいる。

先に切り出したのは高まつちゃんだ。

な「シュート!!!」

魔力スフィアが俺目掛けて飛んできた…しかも、

ユ「……………!!」

やっぱりアクセル言うだけあって速いな……………なら!

ユ「撃ち落とす!!…!行けえ!!」

俺は撃ち落とすべく砲閃花をアクセルシューター目掛けて撃った。  
しかし…

な「待つてたよ!相殺することは想定済みなの」

ギョーン!!…!!

アクセルシューターが砲閃花を避けて向かって来やがった!?高まつちゃんの癖に!!…!

ユ「ちい……………!!しかたねえな!!…!ハアアアアアアアアア!!  
!…!!」

俺が導き出した答え……………

撃つのがダメなら……………肉弾戦だ!!

俺は能力「身体変化能力・エレメントブレイブ」で肩に羽を作つて高まつちゃん目指して……………突っ込んだ!もちろん……………

ドカン！バコン！ボアアアアアアアアアア！

ユ「ハアアアアアアアアアア！！！」

な「ふえええええ！？」

アクセルシューターぶっ壊しながらな！！  
そしてあつという間に高まっちゃんに接近して…

キイイイイン！！

接近…して…

目の前に何故か魔力の塊が…

な「デイバイイイイイン…」

ユ「ちい！！！！サンライズ！装填一発！！右手だぁ！！！！」

サ「一発…装填！！！！」

ガシャ！

おれも右手から薬莢を一発飛ばし、魔力の塊に迫りつつ構える…！！

な「バスタアアアアア！！！！」



ユ「喰らえええええ！「爆龍拳」！！！！！」

ドオオオオオオオオオオオ！！！！

高まつちゃんのディバインバスターと俺の爆龍拳がぶつかり合う……  
一応どっこいどっこいみたいだな……なら……

ユ「あとは……根性だあああああ！！！！！」

な「負けないのおおお！！！！！」

な、ユ「ハアアアアアアアアアア！！！！！！！」

魔力と授天力が激しくぶつかり合う……けど、やっぱり経験か……俺が  
押されてきしまった……

そして……

ドカアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

ユ「がああああああ！？」

な「やったの」

高まつちゃんの癖に……

デイベインバスターに飲み込まれ、壁に当たったと同時に視界が…  
暗くなった……

ユ「……なかなかやるな……」

な「エッヘンなの」

今は道場で結界を解いて、バリアジャケットも解除して休んでいる。  
俺は大の字で寝そべり、高まつちゃんは俺の顔を覗きこみながらニコニコして勝ち誇っている。  
高まつちゃんも……考えながらやってんだな……いつもぼやぼやしてるから気づかなかった……

ユ「…よいしょ……っと！」

俺は大の字から首のバネと反動を利用して飛び起きる。そして道場を後にしようとする。

な「ユウタ君……」

高まつちゃんが心配そうな顔してるな…おそらく、俺の自信を砕いたから申し訳ないなんて思ってるんだろ？  
けど…違うぜ…高まつちゃん…

俺は道場の出口で足を止める。

ユ「負けねえよ。」

な「ユウタ君…!!」

サ《マスター…?》

高まつちゃんがびっくりしてるな…サンライズ、心配してくれてありがとう…

ユ「今回は負けた。完敗だ。けど…絶対強くなって…お前も、お前の仲間も…全部…守ってやるからな!だから…」

俺は高まつちゃんに…いや、なのは)……(と向かい合う。

ユ「だから…特訓に付き合えよ、なのは)……(」!

な「…!!いま…な…なのはって!なのはって呼んでくれたの!？」

ユ「ああ…俺はなのは…」心が強いな”って思う奴を名前で呼ぶんだよ!」

にっ！

俺は心から笑顔を作った。なのは…お前は強いな…まぶしい位に…

なのはも、俺の笑顔に合わせて笑顔になった。

ユ「さあ、模擬戦の後に食べようとあんみつを用意してるから、一緒に食おうぜ！」

俺はなのはに手を差し伸べる。なのはも俺の手に手を乗せた。温かい手だな……

な「うん！！ユウタ君！！！！」

ユ（この温かさ…守ってやるからな…例え…

俺が死ぬような目に会っても…な！）

俺はなのはやみんなの”温かさ”を守る為に強くなることを誓った。

レ、サへ(さ…さっきの笑顔…：永久保存です…／／／／／／／／  
ユウタ様…<sup>マスター</sup>…素晴らしいです／／／／／》

…場違いな奴らが約2名…いや、約2機いなりや最高なんだが…

第13幕「KIZUNA」戦いを通してつながるもの」（後書き）

オマケ

な「ん」 あんみつおいひいの 「

ユ「だろ？そしてあんみつにゃ、緑茶が合つて……和むの」 「

な（なんだか精神年齢が年上なのはうなずけるの……。）

サ、レ《（和んでるユウタ様<sup>マスター</sup>……こちらが和んでしまいます……／／  
／／／）》

ユ（あれ？おかしいなあ……顔は笑顔なのに心がいたあい……）

A・S編第1幕「襲撃者」俺の強さ……見せてやんよ……」(前書き)

作者「更新遅れちまった!!お・ま・た・せ」

ユウタ「待ってねえし……人気無いじゃん……これさ……」

作者「人気がなくても……めげないもん!!!!!!」

サンライズ《執念ありますね……》

A・S 編第1幕「襲撃者」俺の強さ…見せてやんよ！…！」

やあ、みんな元気かい？ハッピーかい？なかなか環境に馴染めず不幸全開の御神 ユウタだ。

はてさて、あれから数ヶ月経った訳なんだが……変わったことと言えばバニスとツツキーをきちんと”アリサ”と”すずか”って言うようになったことくらいですな。

時間飛ばされたのは釈然といかんが、ああだこおだいても仕方ねえし、余りにも普通だったから話す必要ないしな。省くぜ？

今日も学校に行く前に軽くミット打ちしていく。一応朝の日課となっているわけだ。なのはとの鍛練は週末を利用してるんだ。

ダン！！ダンドンダン！！ダンドンダンダン！！

ユ「ハツ、ハツ、ハア！！！」

一定の型でサンドバックに叩き込んでいく。一応空手とかやってたし、それなりに体力を全盛期まで持ち込んだし、それなりに負荷を掛けてんだよな。



そいで一定の量こなしたら…

ユ「サンライズ！授天力コーティングを！」

サ「はい！！マスター！！」

サンドバッグを授天力コーティングして…

サンライズをセットアップせず（……………）手に授天力を  
込める。

ユ「喰らえ！フレーム・インパクト！！！」

ボスツ！！ボアアアアアアアン！サアアア……

フレーム・インパクトは最近編み出したサンライズを介さない技な  
んだぜ？いつまでもサンライズ頼りじゃ、いざって時に足手まとい  
だし…

ユ「さあて……学校行きますか！！！」

サ「はい！！マスター！……今日は体育は「ねえよ！！！」……ちえ〜！！！！」

…本気でサンライズ、メンテナンスしようか…？

### 聖祥大付属小学校

な「あ、おはようなの ユウタ君！」

ア「おはよう、ユウタ！」

す「あ…おはよう、ユウタ君／＼」

ユ「おはよっす！！なのは、すずか、アリサ！今日も三人揃ってんな？」

今日も教室に入るとなのは、すずか、アリサの三人娘が出迎えてくれる。何故かって？……

俺の席、この前の席替えて三人娘の間って言うまさかの位置に……俺に死ねと？

よくよく考えたらさ…変わったこといっぱいあんじゃないよ…

ア「何よその”三人でワンセット”見たいな言い方は!?”」

な「まあまあアリサちゃん! 捉え方の違いもあるの!」

す「そっだよアリサちゃん! 柔さかは大事だよ?」

アリサ…確かに二人の言う通りだぜ?

ユ「そうそう、俺はそんな意味で言った訳じゃねえよ

とりあえず”三人で一人前”的な?」

ア「天誅!?!?!」

ブン!?!?! (アリサが何処からか出したハリセンを振る音)

ひよいッ!?!?! (ユウタが避けました)

ユ「朝から素振りお疲」「残念!!」「へぶつ!?!」

バシィン!!…いん…いん…(エコー)

アリサのハリセンが…顔面にクリーンヒット…痛い…

まあ、こんな感じで1日が始まるわけだが…男子からバシバシ目線を浴びている……  
そっちのケは無いぞ?わりいな…

### 夜、海鳴市上空

?「見つかったか?」

ノースリーブのパワーシャツと青のズボンをはき、両手に銀のガンレットを着けた動物耳の青年が尋ねた。

?「んゝ…いるような、いないような……チラチラ反応はあんだけどよ…」

赤いゴスロリチックな服を纏い、手にはハンマーを携えた少女が青年に応えた。

ぽふん…

？「まあまあ、確かにこの辺だね？とりあえず別れて探そうか？」

そんな少女の頭には手をおいて、純白のジャケットにパンツ、そして黄金の翼を広げた、青髪の少年が言う。

？「……うん、わかった！／／／」

？「……………」

少女は手を置かれているのが嬉しいのか、笑顔を少年に向ける。  
青年は、かなり不機嫌そうな顔をしていた。

？「んじゃ、僕とヴィータはあっち、ザフィーラはあっちね？」

少女、ヴィータには優しく、青年ザフィーラには明らかに除け者のように言った。少年の顔が若干にやけていた。

ヴィ「わかった！／／／」

ザフ「……了解した。しくじるなよ、闇の書は預ける。」

ザフィーラが少年に”闇の書”を渡した。

？「はあ？ザフィーラ、誰の心配してんだよ？手前えは手前えの心配だけしてりゃいいんだよ！！」

ザフ「……！！」

少年は明らかに態度を悪くしてザフィーラに言う。ザフィーラは悔しがるように拳を握りしめていた。

？「さあ、行こうか！ヴィータ！！！！」

ヴィ「うん！！咲哉！！！！」

ヴィータは少年、咲哉の後に続いて飛んでいった。

ザフ「あの男……おそらくヴィータをただの女としか見てないな……」

ザフィーラは自分の無力さに齒がゆい思いが募った……

その頃、御神家

ユ「…よし!!」この”バージョンもなかなかいい感じだ!!」

俺は今日最後の鍛練が終わったところだ。

”この”ってのは、またのお楽しみだ!まだまだ調整段階だしな  
因みにバージョン”H”のフォームは完璧に把握したぜ!

サ《…マスター!魔力反応を感知しました!!…これは不味いで  
すよ!!…!》

突然サンライズが騒ぎ出した。

サ《魔力反応のなかにはなのはさん(……)がいます!!…!》  
ユ「っ!?何だと!?!…行くぞ?」

俺は家を勢い良く飛び出す。…待ってる、なのは!

な「何!?!どこの子!?!どうしてこんなことするの!?!」

私はいま、私くらいの女の子と男の子に魔法攻撃を受けています……  
女の子ならまだましなんだけど……男の子の攻撃は重くて……しかも目  
線が不快なの……

ヴィ「……」

咲「……(なのはちゃん ヤバい!可愛すぎる 絶対俺のものに  
するんだ)」

ブオン!

女の子の手にあった鉄球が赤い魔力を纏っていて、男の子は……まだ  
不快な眼差しを消してくれません……嫌らしくてやなの……

バシユン!!!

鉄球が……放たれたの!!!

な「話を……」

レ《《アクセル……》》



なのはも負けずに、スフィアを作って…

な「聞いてっつてばあああああ！」

レ《シューター！！！！》

当てるのおおお！！！！

ズガン！ズガン！ズガン！ズガン！

やった！全弾命中なの！！相手の鉄球は4、私のスフィアは8…勝ちな

ヒュン！

残り4つであの二人に…牽制なの！！

ヴィ「くっ…！！？」

咲「…！！？」

よし！！体勢を崩したの！！今なら…イケるの！！

な「デイバイイイイイン……！」

レ《バスター！！》

ドオオオオオオオオオオオオ！

私のデイバインバスター、そうそう簡単にはふせげないの！

私は女の子のほうにデイバインバスターを撃つたの！

ヴィ「危ねえ！」

ああ！？受け止めずに避けたの！卑怯なの！！正々堂々勝負なの！  
！（誰もやりません。BY作者）

ビリ………

あ、避けた時に軽くなつたみたいで帽子が落ちたの…  
同時に女の子の目の色が変わってしまいました…  
避けたのがマイナスなの！！（何様だよ…BY作者）

ヴィ「アイゼン！カートリッジロード！！！！」

咲「…ロンギヌス、カートリッジロード。」

あれはユウタ君と同じ……だとしたら……不味いの…

女の子のデバイスのハンマーがピツケルにジェットを付けた感じに…  
男の子の槍のデバイスは三ツ又の槍になったの…

ヴィ「ラケーテン……」

咲「デメテル……」

女の子は体を軸にして回転して、男の子は槍を回してるの……今のうちに！

な「レイジングハート…！」

レ《ラウンドシールド……！》

防御しとかないと…！

ヴィ「ハンマー……！」

咲「ストライク……！」



な「か……………はあ……………」

私はビルに叩き込まれてしまいました…  
バリアジャケットが弾かれて…レイジングハートが…

レ《……………》

スタ…

ヴィ「終わりだあ！！！」

咲「ふふふ……………苦しんでるのも可愛いな……………」

女の子がハンマーを振り上げ、男の子が槍を構えてるの…

私…このまま終わりなんて……………やだよ…

ユーノ君…フェイトちゃん…アルフさん……………

ユウタ君……………

ゴオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

ヴィ、咲「「な！？ウワアアア！！！！！！」」

…真つ赤な光線が、二人を呑み込んで隣のビルに叩き込んだの…光線が放たれた方を見てみると……………

ユ「2対1とは…卑怯極まりないな！！外道ども！！！！」

紅蓮のコートを着て、バリアジャケットを展開しないまま赤い翼を羽ばたかせているユウタ君が……………空中に立っていたの…

続く……………

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0956w/>

---

授天力(エネルギー)の戦士が世界を廻る-作るぜ!!最強の"絆"!!-

2011年10月28日09時07分発行